



『明治の文学5 二葉亭四迷』
二葉亭四迷著
筑摩書房 (2000.9) ¥2,520



『其面影』二葉亭四迷著
岩波文庫 (1987.2) ¥630



『平凡 他六篇』二葉亭四迷著
岩波文庫 (1947.9) *

二葉亭四迷

ふたばていしめい

元治1(1864)・3・10(旧暦文久4(1864)・2・3)～明治42(1909)・5・10。小説家・翻訳家。本名長谷川辰之助。東京都生。東京外国语学校露語科でロシア文学に目覚め、言文一致体の小説『新編浮雲』(明20～22)を執筆するが中絶。その後は文壇から離れ、実業への夢を抱き満州・中国へ赴いた。帰国後は朝日新聞に迎えられ、『其面影』(明39)や『平凡』(明40)を連載。ロシア文学の翻訳も數多く残す。『二葉亭四迷全集』(昭59～平5、筑摩書房) (寺田達也)

構想の上では未完で、覚書によると、お勢と昇とのあいびきが露見して、文三は絶望から発狂するという結末になつていて、「新旧両思想の衝突」や「日本文明の裏面」を描こうとするテーマと、清新な言文一致体によって、日本の近代小説の先駆と評価される作品。苦悩する文三の姿には、自己意識や近代的自我の発露を見るのが一般的な解釈であるが、リストラやひきこもりといった現代にも通ずる問題を読み取ることもできよう。

内海文三は、学問はできるが世才に乏しい内気な男。父親が亡くなつて上京し、叔父の園田家に下宿していた。給費の学校を卒業し某省の下級官吏になつたが、この春、塾生活から帰ってきた園田家の娘お勢に恋心を抱く。母親のお政も二人の結婚を考えていたが、そんな矢先に突然、文三は役所を免職になつてしまい、お政は急に冷淡になる。一方、同僚であった軽薄才子の本田昇は逆に昇進を果たし、園田家に立ち入つてお勢と親しくなっていく。文三は煩悶するが、ひとり二階の部屋に閉じこもり勢への妄想を募らせる。昇と絶交し、相談しようとしたお勢ともかえって喧嘩してしまった。

みどころ

あらすじ

まつた文三は、園田家の動静を危ぶみ、もう一度お勢に相談し、うまくいかなければ園田家を出ようと決心する。(寺田達也)

2-01

新編 浮雲

しんべん うきぐも

- ・青年官吏の苦悩
- ・新しい社会への不適応
- ・近代小説の先駆

浮雲

二葉亭四迷作
十川信介校注



真面目で優秀
だが内気な文
三と、教育あ
る美しいお勢
は周囲も認め
る仲。しかし
文三の免職に

よって事態は急変、お勢の心も世知に長けた昇へと傾いてゆく。明治文明社会に生きる人々の心理と生態を言文一致体によって細緻に描写し、近代文学に計りしれない影響を与えた二葉亭四迷(1864-1909)の記念碑的作品。(解説=中村光夫、十川信介)



7-1
岩波文庫

『浮雲』二葉亭四迷著 岩波文庫 (2004.10) ¥630

■書誌

初出は、第一編が明治20(1887)・6、金港堂刊、第二編が明治21(1888)・2、金港堂刊、第三編「都の花」が明治22(1889)・7～8に連載。全編合本は明治24(1891)・9、金港堂刊。

■文庫情報

『浮雲』二葉亭四迷著 新潮文庫 (1951.12) ¥420